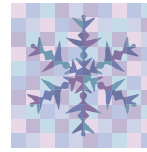


パモジヤ



2006年2月号

~未来のきりん探しの旅に出よう!~

今月のINDEX

- 1) 今月の1枚
- 2) 援助のツボ: ムトワラ小学校事情
- 3) JICA 研修情報
- 4) 事務所からのお知らせ
- 5) 特集: ビレッジ・ステイに参加して

1) 今月の1枚: カシューナッツの実



新コーナー、『今月の1枚』です。

このコーナーでは毎月1枚、タンザニアならではの風景を紹介していきたいと思います。タンザニア在住の皆様、何か良い写真がお手元にありましたらお送りください。

第一回目はタンザニア南部地域の特産、カシューナッツ(スワヒリ語でコロシヨ)です。日本では高価な価格で売られているカシューナッツ。実はこんな風に実をつけているのでした。

2) 援助のツボ: ムトワラ小学校事情

ムトワラ市の小学校における数学の現状について

有光所員

1月21日から28日にかけて、新人OJT研修の一環として、ムトワラ(モザンビークとの国境に近いタンザニア南部の都市)で活動する佐藤シニア隊員そして我が指導役川村所員とともに“ムトワラ市の小学校における数学の現状について”調査を行いました。今回の調査はムトワラ市周辺の公立小学校3校と私立小学校1校を対象に、小学校教師への集団インタビュー、小学7年生への集団インタビュー、小学7年生の数学授業の見学、小学7年生対象計算小テストを行うというものです。



調査結果の前に今回訪れたムトワラの公立小学校の様子を紹介します。左の写真を見ても分かるように、教室で生徒は木製の長机と長椅子に2人、もしくは3人ずつ並んで座っています。学校にもよりますが、教科書は3人程度で共有し、定規やコンパスは持っていない生徒もいるので貸し合っているようです。制服は擦り切れていたり破れていたり様々ですが、皆着ています。私たちのような来訪者が教室に入っていくと、皆起立し、声を合わせて挨拶してくれます。



調査の結果から分かったことはまず、生徒は「数学が好きか？」という質問に皆「好き」と答えるということ。総数134人の生徒にこの質問をしましたが「嫌い」と答えた生徒は1人もいませんでした。「なぜ数学が好き？」という質問に対しては、「数学は他の科目の土台であるから」「数学ができなければ商売はできないから」など、数学が“できる必要がある”という意識が強く働いていることが分かりました。

一方、教師にも「教えるのが楽しい教科」と「教えるのが難しい教科」を聞いたところ、数学に関しては86人中51人が教えるのが楽しいと答え、16人が教えるのが難しい、と答えました。こうした数字を聞くと一見生徒も先生も数学を好み楽しんでおり、タンザニアの数学の未来は明るいではないか！と思ってしまうのですが、現実には決してそうではありません。7年生の生徒にしてもらった四則計算や小数点を含む計算の簡単な計算テストを見ると、本当に単純な加減算でも生徒が躓いているのが分かります。例えば、『 $4+3 \times 2 =$ 』という問題の正答率はなんと7.5%。小学7年生279人のうち、この問題が解けた生徒は21人しかいないのです。

上述したように3分の2の教師が数学は教えるのが楽しいと答えているにもかかわらず、私たちが「なぜ教師や生徒は数学が嫌いなのか？」という質問を投げかけてみると、教師の口からは次々と数学という教科を他の教科とは違う特異な教科であるから、という意見が出てきます。「数学は実生活との結びつきがないから」「数学は難しいから」「数学の授業にはユーモアがないから」「数学の性質はタンザニア人に合わない」「数学の授業の準備には非常に時間がかかるから」「教えるための教材がない」等等。

このように、生徒と先生へのインタビューの様子からは教師と生徒の中に数学に対する固まったイメージが先行して存在していることが分かりました。私が今回の調査を通じて一番強く感じたのも、この数学に対するイメージ打破の必要性でした。佐藤シニア隊員は「数学を楽しみながら学ぶことで数学に対するイメージは大きく変わる。授業の中にちょっとしたゲームや手作り教材などを取り入れるなどの一工夫が大事」と言います。実際、佐藤シニア隊員が各小学校で行った『定規とコンパスの使い方』のデモンストレーション授業(定規とコンパスを用いてカンガ(タンザニア特産の布)をデザインしよう、というもの)には生徒の感性を刺激するような工夫が隔々にちりばめられており、授業を受けている生徒の表情はとても豊かに変化していました。



一方でタンザニア人の教師による数学の授業を見学してみると、数学の教え方に穴があるのが分かります。教師は今現在取り組んでいる単元にのみ当てはめられるような解法を少々強引に教えていたり、本来ならば答えにたどり着くために踏むべきステップを省略していたり、教師の説明には他の要素がその問題に加わるとすぐにつまずいてしまう様な荒さが目立ちます。佐藤シニア隊員は、「数学を教える教師自身はこれらの計算の論理は体に染み付いており問題を解くこともできるのだと思うが、その論理のステップを整理して丁寧に教えることができていない。小学校で学ぶ数学にも中学校で学ぶ数学にも、両方に普遍に適用できる解法(論理)を生徒に教えることが大切だ」と言います。

今回の調査では1週間『数学』に焦点を当てたことでより教師、生徒が日頃抱えている問題に近づくことができたと感じています。また、佐藤シニア隊員と川村所員の堪能なスワヒリ語、そして佐藤シニア隊員が日頃から培っている人間関係無し**佐藤シニア隊員**には1週間という期間でここまで中身の濃い情報を収集することはできませんでした。

佐藤シニア隊員はムトワラにある南部ゾーン学校視察官事務所を拠点に今日も相棒のドライバー“ムバ”、そして配属先の人々と、手作りの教材を持って周辺の学校を訪問されていることと思います。次回また佐藤シニア隊員にお会いした際、エネルギーな活動の進捗状況などを教えていただくのをとても楽しみに、今後数学が心から好きだと感じる生徒と先生が増えることを願うばかりです。

日常業務指導係から

川村所員

新人研修の日常業務指導係として、有光さんの出張に「引率者」として一緒にムトワラに行ってきました。昨年の新人2人の時はキゴマの難民キャンプに1週間行き、やはり「引率者」として一緒について行きましたが、何と「引



率者」の私が途中で風邪をひいて、1日半ダウンするという失態をおかし、一体どちらの方が引率しているのかわからない事態を引き起こしました。かかる経緯もあり、今年は汚名を挽回するために張り切りました。

今回の出張の特徴は、より実りあるものとするために、佐藤シニア隊員とも相談の上、小学校で佐藤シニアの活動を単に視察するのではなく、一環したテーマを決めて各学校で自ら調査することとしました。そのテーマとは「小学生の考える数学という教科は？」ということと、「一般的に小学生の数学の成績はなぜ悪いのか」ということです。数学に関する調査結果は有光さんが既に記載済みですので省略しますが、今回はそのテーマの他に、有光さんとも相談してJICA的に興味のある「タンザニアの子供の将来に関する考え方」も調査しました。そう書くと大げさですが、具体的には今回訪問した4つの小学校6～7年生に対し「将来は何になりたいですか？」「幸せを感じるのはどんな時ですか？」「あなたにとって大切なものは何ですか？」(後者2つはJICAのピーストークマラソンのテーマです。ピーストークマラソンを知らない人は是非JICAのホームページをご覧ください)の3つの質問を聞きました。主な結果は以下のとおりです。

(写真:我々の質問に答えてくれる小学7年生達。Mtwara市内のRahaleo Primary Schoolにて)



(1) 将来は何になりたいですか(男女の合計)?

第1位 医者 26人

第2位 パイロット、看護師 20人ずつ

第3位 学校の先生、会計士 16人ずつ

(番外編) TANESCO(電力公社)の社長 3人、大工 1人、農家 1人

会計士が人気だったのは個人的には意外だった(お金を扱う職業へのあこがれでしょうか)のと、やはり不安定な電力供給に悩まされる現状を反映して電力公社の名前が出てきたのは興味深かったです。

ちなみに日本の子供の将来になりたい職業のランキングはというと、第一生命ウェブサイトで調べてみると以下のとおりです。(2004年統計、小学校1～6年生を対象に調査)

男の子

第1位 野球選手 15.5%

第2位 サッカー選手 10.7%

第3位 学者・博士 5.4%

女の子

第1位 食べ物屋さん 14.8%

第2位 保育園・幼稚園の先生 9.6%

第3位 看護師 7.4%

(2) 幸せを感じるのはどんなときですか?

- ・勉強しているとき(多数が回答しました。でもこう言わなくてはと思って言っているような子も・・・)
- ・お客さんが来た時(wageni (Guest)好きな国民性は小さい時からあるものなのですね)
- ・サッカーをしている時(子供にはサッカーは大人気でした)
- ・お母さんのお手伝いをしている時(偉い!!)
- ・神様にお祈りをしている時

(3) あなたにとって大切なものは何ですか?

- ・勉強(上述のとおり、先生の手前言っているような子もいましたが・・・)
- ・書くこと(この回答はどの学校でも出ました。忘れたくないことを書き留めておきたいというのが主な理由とのこと)。
- ・ご飯
- ・フルーツ(この答えも結構出ました。ご飯の後にはフルーツは是非食べたいとのこと)
- ・歌うこと
- ・住むところ



今回は佐藤シニア隊員の強力なイニシアティブもあり、あまり「引率者」としての責務は果たせなかったような気もするのですが(すみません)、唯一偉そうにいえるのは、協力してくれた機関に最初はきちんと趣旨を伝え、最後にはお礼と調査結果を報告できたことでしょうか。

ちなみに新卒採用でJICA職員となると、最初は同じ課の中から「日常業務指導係」が任命されます。新規採用職員はその人を通じ、JICAでの仕事を一から教わるのです(もちろん上司がきちんと指導することが大前提ですが)。ですから指導係というのはその新規採用職員の今後のJICA人生に大きく影響を与え兼ねない責任重大な仕事で、任命される方もかなりのプレッシャーを感じながら、指導をしております。

2) 耳より！ JICA 研修情報

現時点でタンザニア政府に候補者の募集をかけている、日本で行われる研修コースをリストアップしますので、カウンターパートに研修の機会を与える場になれば幸いです。なお、紙面の関係上、研修コース名と研修期間、応募締め切り日のみを記載しますので、詳細な情報が必要な方は事務所の加藤もしくはムソフェまでご連絡ください。以下のコース以外でも研修に関して質問がある場合には、いつでもどうぞ。なお、研修に応募するためには、履歴書、健康診断書およびカンントリーレポートの作成、その後人事院のスタンプをもらう等多くの作業と時間が要求されます。ですからなるべく余裕を持って連絡をいただくと助かります。

なお、留意点は以下のとおりです。

- ・ どのコースも基本的にはタンザニア政府の人が対象です(民間会社で働く人は対象になりません。一部のコースは NGO の参加も OK なものもあります)
- ・ どのコースにも応募にあたっての資格要件があります。この要件を満たさないと応募することはできません(特に年齢制限には要注意)。
- ・ どのコースも 1 名(もしくは 2 名)の枠に対し、4~5 名程度の応募がありますので、応募をしたからといって、受かる保証はありませんので、ご注意ください。

現在募集中のコース(コース名、研修期間、応募締め切り日の順)

- ・ Research for Tropical Medicine 2006/3/26 ~ 2006/3/24, 2006/2/21
- ・ Agricultural Extension Planning Management 2006/5/9 ~ 2006/7/15, 2006/2/20

研修情報

加藤所員

「アジア・アフリカ知識共創プログラム」

「研修事業」は、ある一定の期間、日本で実施する研修に各国からの研修員が参加するというのが主なものですが、今回はその拡大版を一件ご紹介します。皆さんは今まで「南南協力」という言葉を耳にしたことがあるでしょうか？簡単に纏めると、「途上国が連携を深めながら技術協力や経済協力を行いつつ、自立発展に向けて行う相互の協力」ということになりますが、今回紹介する案件はアジアとアフリカの国々が集まり、あるテーマにおけるそれぞれの国で抱える問題、これまでの経験を共有したうえで、設定されたパートナー国の間で技術協力を実施するというものです。

本プログラムでは、タイにおける「HIV/AIDS 対策」の取り組みを参考とし、また実際にタイからの技術的サポートを受けながら、タンザニアでの HIV/AIDS 感染予防に繋げることを目的としています。

確かにアジアとアフリカでは歴史、風土、人、文化あらゆる部分で異なる部分が多く、アジアでの経験がそのままアフリカに適用できるとは言えないものがあります。しかしながら、今後 JICA タンザニア事務所としては、当地における「HIV/AIDS 対策」の動きと、アジアの経験を照らし合わせ、どの部分がアフリカで有効かを見定めながら、本プログラムを実施していく考えです。



3) 事務所からのお知らせ

次長の「目(jicho)」

高橋次長

JICHOとは、スワヒリ語で「目」の意味です。

今月の一言は、『知行合一』です。

12月14日に大統領選挙も無事に終了し、年末年始を跨ぎ、閣僚、次官等も任命され、2006年は、名実ともに新しい年としてスタートしました。

私自身は、1月中旬に次長会議出席のため、東京へ出張する機会がありました。5日間に及ぶ会議を通じて、JICA事業も変革の総仕上げに立ち向かっており、本部、在外事務所ともにより良い事業のために、めまぐるしく日々改善し、仕事に取り組んでいることが良くわかりました。

その中で、感じたことを四字熟語にすると、知行合一(ちこうごういつ)という言葉です。知行合一とは、中国、明の時代の王陽明が、「知は行のもとであり、行は知の発現である」、と説いた、ことに始まるそうです。対照的に先知行後行(=知識によって事物の理を極めてこそ、それを実践しうる)という朱子の言葉もあるそうですが、あえて、知行合一を強調したいと思います。

先回の「次長の目」の最後に、二元論の重要性を紹介しましたが、引用した「バカの壁」の本文においても「戦後、我々が考えなくなってしまったことの一つが身体の問題です。身体を忘れて脳だけで動くようになってしまった」とあります。知識を積み重ねて、壁を作り、脳社会となってしまった現代社会への警鐘、と理解しました。さらに、著者である養老氏は、「知行合一」の解釈を「知ったことを行動しなければ意味がない」としています。なるほど、と思いました。情報化社会の中で、情報にまみれ、分析に追われ、具体的な行動、真の目的を見失ってしまうことが多くなっているのではないのでしょうか。

先日、帰国する専門家の報告を受けた時に、こんな話がありました。医療機材のデータベースを構築し、運用するメカニズムを北西部の病院で進めたところ、関心がどうしてもデータベースのメンテナンスに偏り、機材の適切な運用、医療サービスの向上といった、本来持つべきモチベーション、目的が薄まり、見失われてしまうこともある、とのことでした。問題意識、課題解決への取組が小手先の技術の関心にすりかえられ、矮小化されないように、常に検証することが必要だと感じました。

JICAのさまざまな取組、制度改善なども常に、開発途上国における課題解決と距離を置くことなく、達成されなければなりません。JICA内部の業務改善、手法の完成度を高めることなどは、結果として伴えばよいことで、そのことが目的となってはいけません。そのためにも、開発途上国で働く我々は、情報収集にとどまらず、常に行動を伴い検証していく、走りながら考えるアプローチも備えなければなりません。合理性、論理性の重要性は認識しつつも、立ち止まることなく、行動を伴うことが重要です。

冒頭申し上げたように、新しいキクエテ大統領の舵取りにより、これからのタンザニアという国の発展が実現できるように、タンザニアが考える方向性に我々も歩調をあわせ、傍観者ではなく、評論家でもなく、共同実施者として、行動に移すことが求められます。また、すでにそのような活動を体現しているコミュニティ団体、民間企業、協力隊員、専門家の皆様のお互いの活動の連携も必要に応じて図り、JICA事務所としての必要な架け橋としての役割を果たしていきます。

タンザニア最新道路事情

昨今のタンザニアでは、外国人を含む富裕層の中で車社会が急激に浸透しています。今後、初めて車を運転する人も増えるでしょう。整備不良の車も多く、交通事故も当分の間は減ることはないと思います。



被害者となることも加害者となることも望んでいなくても、そのリスクは高まっています。

自動車整備の協力隊員からも「日本製の車が増加しています。その多くは、日本の環境基準に見合わない仕様であり、排ガスのみならず、日本ではもはや使用されていない種類のフロンガス、エンジンオイルの廃棄などが日常的に行われ、このままでは、日本車がタンザニアの環境汚染を加速度的に進行させています。」と嘆いていました。彼らは、嘆くだけでなく、協力隊活動を通じて、廃棄物の処理、フロンガスの影響、車検制度などによる予防メンテナンスなどについて、具体的な行動して、実行しています。一人の人間での行動は、限定されたものですが、行動としては大きな一歩だと思えます。このような取組を今後も紹介していきます。

さて、赴任後3ヶ月を経過し、この間、ダルエスサラーム以外にも南東部、南西部、北部と、地方出張に出向くことができました。そこで気づいた事は、幹線道路の一部は整備されつつあるものの、対照的に地方道の整備が不十分であることです。特に、南東部では、乾期には水の確保に四苦八苦し、雨期になると道は川となり、度々通行不可となり、人々の生活道路へのアクセスに著しい影響を与えます。

地方出張において、よくある光景で、幹線道路を時速 140km で走っていた JICA 公用車は、突然、悪路に阻まれ、時速 20km にスピードは落ち、車内で窓にへばりつくようにして数時間走らざるを得ない状況となります。タンザニアの幹線道路ネットワークは全長 85000km、舗装区間はその 5%、約 4000km あまりのみです。地方道にいたっては全長 50000km のうち、通行状態が良好とされているのは、10% 未満とのことでした。私が、これまで出張で走行した距離を試算すると、延べ 7000km、重複を除けば、ほぼ 2000km、幹線道路の舗装路の 50% を走ったこととなります。広い国土とはいえ、舗装路の大半はすでに走行したことになり、残りは未舗装路であったり、部分的な舗装路ということになります。

幹線道路ですら、ほぼ全区間が舗装されているのは、ダルエスサラームから北部アリューシャ方面へ向かう 700km、モロゴロ、イリンガを経て、南西部ムベヤへ向かう 1000km くらいです。南東部ムトラ、北西部ムワンザへは幹線道路ですら全区間舗装されていないのが現状です。

様々な道路整備事業がタンザニア政府、各ドナーからの援助で進められると同時に、JICA では今回、道路の建設、維持管理を住民自らが実施する適正技術開発への人材育成を支援することにつき、タンザニア政府との間で合意しました。11 月下旬、事業の拠点となる施設がある南西部ムベヤまで出張してきました。モロゴロ、イリンガに立ち寄り、専門家、協力隊員の配属先も訪問し、2 日かかりでムベヤに到着しました。南西部は丘陵地帯が多く、標高も高く、気候も比較的、沿岸地帯よりすこしやすそうな印象を受けました。農作物の種類も多く、幹線道路沿いには、集落、学校、医療施設もあり、道路整備が人々のアクセス、農産物の物流の改善にも役立っているように思われました。ここ、ムベヤからマラウイ国境方面へ 50km ほど走ると、今回の目的地、Appropriate Technology Training Institute (ATTI) に到着します。ATTI では、道路建設、補修において、重機を使わずに、非熟練者でも道路建設、補修を行うことができる Labor Based Technology (LBT) と呼ばれる技術を通じた人材育成を目指しています。かつて、ILO、ノルウェー政府の援助を通じて、施設整備が行われました。今回のプロジェクトでは、ATTI が LBT 技術を研修する機関として認知され、地方道整備において、村落住民、テクニシャン、エンジニアなどが研修を通じて自発的に生活道路を整備、維持管理されることを目指しています。

プロジェクトが終了する 4 年後が楽しみです。

先回の「現場主義」には、本部勤務の職員、タンザニア国内の協力隊員から励ましの感想を頂きました。とてもうれしいことです。ご意見等、ぜひお聞かせください。

メールアドレス; Takahashi.Naoki@jica.go.jp

今月の危機管理

老川所員

< 悪化する治安状況 VS キクウエテ政権 >

12月の大統領戦が終わり、今年に入ってからキクウエテ新大統領による省庁再編、大臣任命が行われ、徐々に



新政権の政策やメッセージが明確になりつつあります。今回は悪化しつつあるタンザニアの治安状況に対して、キクウェテ新政権がどのような姿勢で臨むのか、果たしてそれが有効に機能するのかについて考えてみたいと思います。

治安担当の新省庁誕生！

ムカパ政権の終盤から治安の悪化が政府の懸念事項の一つとして挙げられていましたが、キクウェテ新政権も治安問題を1つの大きな課題として表明しています。その証拠にキクウェテ大統領は、それまで Ministry of Home Affairs の下にあった治安・警察機能を独立させ、Ministry of Public Safety and Security(MoPSS)を新設、治安対策機能の強化をまずは組織面から打ち出しました。

自らの襟を正せ！ ～警察当局内の汚職撲滅へ～

キクウェテ大統領は、1月13日に MoPSS を訪れ、大統領としての MoPSS への全面的なバックアップを表明すると共に、一部の警察関係者が犯罪の片棒を担っているという国民からの嘆きを受けて、幹部に対して、内部の不正・汚職に対して厳しく対応するよう指示しました。具体的には、警察内での包括的な内部監査を行い、不正を行っていると思なされる警察官はクビにするとし、例え確固たる証拠が揃わなくとも、「疑わしき犯人」に対しては即刻アクションをとるべきとの姿勢を明確にしました。

命を奪うことも止む無し！ ～銃器犯罪者への厳しい警告～

キクウェテ大統領の意向を受けて、MoPSS のムワパチュ大臣は、「タンザニアにおいて銃器による強盗事件が急増しており、人々の安全を脅かしている」との現状認識を示した上で、この問題に厳しく対応するためとして次のような警告を強盗グループに対して発しました。”Robbers should know that if they are prepared to kill, they should also be prepared to be killed(人を殺す用意がある者は、自分も殺される覚悟をしておけ)”と。

銃による強盗事件の続発！ ～カリアコーでの事件の例～

このムワパチュ大臣の警告に関わらず、その直後の1月14日にダレサラムのカリアコー地区において、白昼堂々と銃を持った強盗団が宝石店を襲い、警備員などに発砲した上で逃走するという事件が発生。同日の夕方、犯人グループの一味と思われる数名を発見した警察は、彼らに対して発砲し、4名が殺されるという結果になりました。先の大臣の言葉を実行する形での警察側のこの対応でしたが、後に「銃殺された4名は実は犯人一味ではなく、何の罪もない宝石のトレーダーだった」という説が浮上し、この警察の対応は大きな物議を醸し出しています。目下大統領の任命の下で特別捜査委員会が発足し、2月中旬までにレポートを提出することとなっています。このカリアコーの事件に留まらず、残念ながらキクウェテ政権の決意表明とは裏腹に、銃による強盗事件がダレサラム、アルーシャ等で続発しています。

何が有効な対策なのか???

カリアコーでの事件も受けて、「犯人の銃殺にも躊躇しない」という新大臣の方針に対してすでに一部では「問題の解決にはならない」との批判もあがっています。では、どうすればよいのか?? 増え続ける犯罪件数に警察当局が対応できていない一因に、先端技術に対する知識・経験不足、設備・機材の不良などが挙げられており、カリアコー事件の直後には MoPSS の副大臣が犯罪への対応方針として以下の点などを発表しました。

- 1) 警察官がより効率的に業務を遂行できるように、先端技術に対するトレーニングを行う。
- 2) 警察官に対して、交通手段も含めてより適当な「working tool」を提供する。
- 3) ダレサラム、アルーシャ、モシ、ムワンザ等の都市部においては、警察のパトロールを強化する。
- 4) ダレサラムにおいては、防犯カメラの設置を導入する。

タンザニア政府も認識しているように、警察自体の自浄作用や能力強化は、犯罪減少に向けた大前提となるかと思っています。カリアコー事件においては、無線連絡の不備から警察が現場に駆けつけるのが遅れたと言われており、



また、1月23日にダレサラムの両替所にて発生した強盗事件においては、警察の緊急連絡番号に通報したにも関わらず誰も電話に出なかったという事態も発生しております。

まずは現状をしっかり認識することから！ ～1人1人にできる安全対策～

以上、新政権と警察当局の犯罪取り締まりに対する対応を見てきましたが、翻って私達1人1人ができる安全対策は何かについて最後に触れてみます。一番大事なことは、「大統領や警察が躍起になるほどタンザニアでは悪質な犯罪が増加傾向にある」という現状をしっかり認識して、行動する際には常にリスクを想定することではないかと私は思っています。そのためには最新の情報を常に頭に入れておくことが必要であり、新聞報道や周囲のタンザニア人の話などに耳を傾けて、犯罪の傾向を押さえておくことが大切です。強盗犯罪の多くが、街中の換金所、宝石店、携帯電話ショップ等で発生しておりますが、そのリスクが頭に入っていれば、これらの場所には極力近寄らないようにする、店内に入る場合は中の様子をよく確認してから入るようにするなどの予防策が取れるのではないのでしょうか。また、車内盗難やカージャックの手口を承知していれば、ドアを必ずロックする、外から見える場所に貴重品を置かない、本人や警備員の目が届かない場所には駐車しない、夜間は一時停止が必要なルートを避けて通るなどの対応が可能になるのだと思います。事務所からも可能な限りの情報提供を行いますので、みなさんもぜひアンテナを高く張っていただき、有用な情報を得た際には事務所との共有をお願いいたします。

< 1月の犯罪被害報告 >

日時	場所	被害内容	教訓
1/10 午前 7時 半～ 9時	ムソマ	教師隊員が授業中で留守にしている間に空き巣が侵入。玄関のグリル及びドアが壊され、入り口付近においてあったJICA貸与の自転車を盗まれた。	留守を狙われている可能性が高いため、このような場合は昼間であっても警備員を雇用する。

協力隊員発！

(1) 体験交換学習会

15-3 次隊、タンガ、神谷健太郎隊員



“数学”が“数楽”になったら、勉強を嫌いな生徒が少なくなると思いませんか。その為に、一番勉強をしていかなければならないのは、誰だと思いますか。私は、我々教員ではないかと考えます。

今回の体験交換学習会では、“机上の学問が実社会の中でどの様に応用されているか”という疑問を様々な職種の隊員と共有することによって、その応用例を数多く学び、「なぜ数学を勉強するのか」、「なぜ生きて行く為には勉強が必要なのか」を生徒達に伝え、先の数楽を促すことを目標としました。具体的には、三角関数と環境測量計算、モーメントと人体負荷、オームの法則と自動車診断、そして筋肉構造とストレッチング等を勉強しました。

時代と共に変化する実社会の中で、求められる人材を排出していくのは教師隊員であり、実社会の変化に敏感なのは現場の隊員です。教育が現場のニーズに答え、現場が教育のニーズに答えていく。やがて時代に合った人材が学校から社会へと輩出される。この“教育 → 現場 → 教育”という社会の流れを作るきっかけとなる意見交換の場が、この体験交換学習会でした。そして、こういった教育と現場とのコラボレーションこそ、我々JICA ボランティアにしかできない現場主義活動なのではないでしょうか。



(2)トヨタ電子制御システム技術研修会

15-3 次隊、ムトワラ、小笠原武隊員

(開催経緯)

皆さんもご存知のとおり、現在タンザニアでは都市部以外でも急速なモータリゼーションが進んでいます。タンザニア国内で現在主流になりつつある、1990年以降に製造された車両は、その制御の多くに電子制御が採用されており、その利便性から今後も増加していくことは容易に予想されます。

しかし故障に対する対応は、技術の急速な変化にほとんど対応できていない状況にあり、職業訓練校では電子制御システムの基礎知識と診断技術の習得が期待されています。VETA が使用する指導要領にはそれらの内容がすでに盛り込まれていますが、講師の知識や経験が不足しており、早期の技術移転が望まれています。

自動車部会では、電気装置の診断の基礎から電子制御システムの構成や診断方法の技術移転を行う場として技術研修会の開催を企画しました。

(実施内容)

テーマの選定についてはタンザニア国内の交通事情を考慮し、登録車両の多くを占めるトヨタ電子制御システムとしました。(上記 TCCS: TOYOTA Computer Controlled System)システムは車両の形式が異なっても制御はほぼ同じであり、同メーカー他車種への対応も可能です。技術研修会の中でも特に重要な診断方法については、特殊な機材を用いず一般的に入手しやすいサーキットテスターを使用する方法を提案しました。教材は昨年10月に隊員支援経費にて導入した車両を使用しました。車両の前側部分のみをダルエスで購入後隊員が教材用に加工したもので(材料はすべてタンザニア国内で入手可能)今回は、この教材の作成についても提案しました。

(開催に至るまで)

今回の会場となった VETA ムトワラでも同様の問題を抱えていましたが、二代目隊員の赴任以来、電気装置に対する整備技術の向上を目指し日々の活動に取り組んできました。基礎知識を向上させるためのオームの法則の練習、活動支援依頼による資料整備、毎週土曜の電子制御コース、隊員支援経費による教材の導入などの対策を行い、赴任当初は電子制御車両を見るだけで後込みしていた整備士も、今では故障と向き合えるようになりました。

カウンターパートへの技術移転も順調に進んでおり環境も整っていることから、VETA ムトワラでの開催としました。ボランティア調整員からの助言もあり、隊員とカウンターパート以外に、タンザニア国内の VETA 自動車整備コースの講師を誘致しての、非常に規模の大きな技術研修会となりました。



会場の様子

講座の内容をその場ですぐに確認できるよう、会場中央にモデルを配置し(写真左下)、その周囲に各グループを配置した。



隊員とカウンターパートによる合同授業の様子

故障時の車両データを図にまとめ、その採集データをもとに、診断手順をフローチャートにまとめる。



(技術研修会を振り返って)

事前に導入テストを行い、その結果をもとに26人のVETA講師およびカウンターパートが、5つのグループに分かれて、講座は受講者全員で、実習はグループごとに課題に取り組む形としました。各グループには隊員およびカウンターパートが1名ずつ配置され、グループ内で理解できない課題に対し、互いに意見を出し合い、実際に計測を行い、問題解決に取り組む姿が見られ、会場は常に熱気に包まれていました。また、隊員が提案した診断手法は、車両データ採集のあと、診断方法をフローチャートに展開していくというもので、故障時の車両の状態、正常な状態と比較し、図に変換する過程で問題が整理されていくこの方法は参加者から大きな支持を得ていました。

講座は隊員個人が行ったものと、隊員とカウンターパートの合同授業を行ったものがありましたが、合同授業中には、スワヒリ語で意見が積極的に飛び交う場面が多く見られその効果の高さを知らされました。

実施後のアンケートには、今回紹介できなかったシステムについても、もっと学びたいとの意見が多く含まれ、継続的な開催の必要性を感じました。また、隊員のプレゼン手法や語学レベルについての指摘もあり、今回の技術研修会で得た反省を自動車部会で、話し合い今後に生かしていきたいと考えています。



今回参加して下さったカウンターパート

VETA自動車整備科講師の皆さん

毎回さまざまな、不具合現象が発生し(隊員が設定します)、皆さんの頭を悩ませた今回の教材を囲んでの1枚

4) 特集:ビレッジ・ステイに参加して

有光所員

去る1月3・4日、タンザニアJOCV隊員のダルエスでの語学研修の一環として恒例のビレッジ・ステイに、現在タンザニア事務所で新人研修中である私も参加させていただきました。

私がタンザニアに来て早いものでもう4ヶ月が経ちました。この4ヶ月という時間は決して短い時間ではありませんでしたが、これまでの私のタンザニア生活の中ではタンザニアの人々の営む生活の一端を垣間見れることはあっても、その生活の全体の流れは私の中でまだまだ闇に包まれていました。外国人の多く住む地区に住み、日中はダルエスサラーム中心に位置するオフィスで過ごすという日常生活の中でこちらの人々の日常とリンクする場所、時間を見つけることはなかなか難しく、同じ都市に住みながらも異なる空間、時間軸の中で生活をしていると感じていました。そんな状況をもどかしく思いつつも、なかなかタンザニアの人々の生活空間にアクセスする突破口を見つけられずにいた私にとって、今回のビレッジ・ステイはまさに願ってもいないようなチャンスでした。

そうして意気込んでいざ向かったビレッジ・ステイ先のマブエパンデ村(Kawa地区を海の反対方向に15分ほど車で進んだところに位置します。)では、1泊2日、通算約26時間という時間を通して、村の人々の一日の営みを知り、そこに流れている時間を感じることができました。今回は私が村で体験したことの一部、水汲みについて紹介をさせていただきます。

水汲みという仕事

村の人に家で一泊させてもらった翌朝、外では普段と変わらない一日がもうすでに動き出している中、朝7時頃に一足遅れてようやく私達は目覚め、のそのそと動き始めました。顔を洗い終えた私はホストシスターに代わり、家の前の掃き掃除をしました。こうやって、ゴザを敷いて寝転んでも裸足で走り回っても痛くないような、その日一日を居心地よく過ごせるような空間を毎日作っているのだなと思いながら、枯葉やつぶれたマンゴー、小さな石やごみなどの落ちた広場を丁寧に掃きました。掃き掃除を終え、次は昨晚の夕食の後片付け(洗い物)をしないといけなあとのおんぴりと思っていると、ホストシスターが色とりどりのパケツとカンガ(タンザニア特産の布)を木の下に集めているのに気づきました。そうです、水がないと昨夜の洗い物もできません。ホストシスターに導かれ、私達はそれぞれにバ



ケツとカンガのセットを手に持ち、穏やかな気分で水汲みに出発しました。マハラゲの豆畑の間を抜け、登り道や下り道、曲がりくねった道を経てと歩き続けるのですが、15分ほど歩いてもなかなか川らしきものは視界に入ってきません。帰りの道のりに不安を覚えながらもさらに15分ほど歩くと、ようやく緑の茂みとともに川が現れました。

私達が家に持ち帰る水は川の近くに掘ってある深さ2m程の穴から汲み上げます。当たり前のことですが、バケツに

水を満たすとバケツは一気に重くなります。私はまずタンザニアの人を真似てバケツを頭に乘せてみました。クッション用に丸くるんだカンガを頭の上に置き、その上に、中腰になり他の人の手も借りつつバケツを乗せます。私の初体験バケツオンザヘッド歩行距離は約10m。頭の上のバケツは予想以上に重く、首を揺らさないよう固定してその重みのバランスをとるのはとても難しいのです。しかもバケツの中身は水。少しでもバランスを崩すと容赦なくこぼれてしまいます。結局初めの10mから先はずっと手と腕、そして腰を使って運びましたが、運んでいる最中は雑談をしながら歩く余裕もなく、黙々と前へと進むことで精一杯でした。それでも案の定帰りの道のりには行きの時間の2倍、約1時間かかっていました。道中頭にバケツを乗せた村人が私達を追い越していくのですが、必死の形



(水汲みに苦心する筆者)

相でハアハア言っている私達を横目に、「水運んでるの？ポレ ナ カジ(お疲れ様)！」と笑顔でスタスタと歩いて行ってしまいます。そんな彼らの頼もしさと自分の生命力の無さはあまりに対照的でした。また、運んでいる最中、「ビレッジ・ステイがもしも2泊3日であったら明日の朝もまたこの水汲みをしないとイケないのか…。それはムリだ…。」と、(水は一日の生活に欠かせないので)本当は拒否する余地などないはずの水汲みという仕事に、勝手にギブアップしている自分がいました。それだけ、頭で考える以前に体力的にギブアップしてしまうほど、少なくとも私にとって水汲みは予想以上にキツイものでした。

こうして水汲みというクライマックスを経て、私のビレッジ・ステイ体験はとても鮮やかな印象の中に終わりました。今回の経験を経て、今後は“水不足”や“食糧不足”といった単語がさらに違った意味を持って私に響いてくるように思います。このような貴重な機会を与えてくださった村上ボランティア調整員をはじめとする事務所の皆様、村上ボランティア調整員とともに村でのアレンジに奔走して下さった語学学校 Kiswahili Africa の先生方、そして私達を快く受け入れて下さったマブエパンデ村の皆さん、本当にありがとうございました。

パモジャでは引き続き皆様からのご意見・ご感想をお待ちしています。特に特集ページでは援助分野に関係なく、タンザニアのさまざまな分野における一般的な概要をご紹介できればと思っています。皆様の役に立つ、楽しいニュースレターにしたいと思っておりますので、取り上げてほしい特集・リクエスト、投稿など、どしどし下記のメールアドレス宛、あるいは直接ご連絡ください。なお、リクエストの要望をいただいておりますが、執筆者の都合等で取り上げられていない方にはお詫びいたします。申し訳ありません。

なお、パモジャ(Pamoja)とはスワヒリ語で「一緒に(together)」という意味です。

Email address: Arimitsu.Sachiko@jica.go.jp



JICA タンザニア事務所
2006 年 2 月